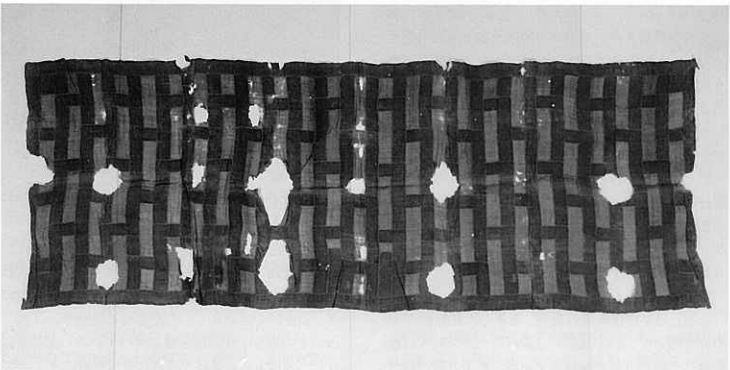
平成４年７月１日

佐賀県立博物館・美術館報

No.97

佐賀市城内１丁目15番23号　ＴＥＬ 0952(24)３９４７　ＦＡＸ 0952(25)７００６



黒麻地二十五条袈裟（鳥栖市・萬歳寺）

以亨得謙が使用したもの。中国・元時代もしくは室町時代に制作されたもので、県内の袈裟としては最も古いものである。墨染めの麻布を黄色の絹糸で縫い合わせたもので、以亨得謙の号である「慄牧」の縫取りがある。

以亨得謙は14世紀後半に活躍した臨済宗の僧で、20歳で中国に渡り、30年の修行の後に帰朝し、鎌倉の建長寺を拠点として五山の文学僧たちの中心となって活躍した。その後九州に下り肥後に国泰寺、肥前に萬歳寺を建てたといわれる。応永９年（1402）に萬歳寺で没したと伝えられ、90歳に近い高齢であったと推定される。

染織の資料としては勿論、歴史に名を残す名僧の遺品として貴重なものである。平成４年３月に佐賀県の重要文化財に指定された。（２～４頁　参照）

目　次

○黒麻地二十五条袈裟……表紙
○資料紹介「萬歳寺（佐賀県鳥栖市）の法衣類について」……Ｐ２～４
○資料紹介「常設展－貝と貝化石より－」……Ｐ５～７
○行事のお知らせ……Ｐ８

資料紹介

萬歳寺（佐賀県鳥栖市）の法衣類について

京都国立博物館　河上繁樹

黒麻地二十五条袈裟　一領

［法量］縦100.5㎝　横276.5㎝

［形質］墨染、麻製の二十五条割截衣（注１）。縁、角帖（差図１）とも共裂の墨染の麻を用いる。壇隔（差図１）は三長一短（注２）。葉相は開葉で、各縦葉の一箇所と横葉下辺の一箇所を約３㎝ほど開ける。縫い方は黄色の絹糸で各壇隔ごとに縦葉と横葉を続けてＬ字型に刎刺縫い（返し縫い）したもので、表の糸目は点線となってあらわれ、裏の糸目は鎖縫い風に縫われている。角帖の縫い方は、表側では糸目が三点飛びにあらわれるように刎刺縫い（返し縫い）している。右第五条の裏側、第一段目の横葉の部分には、環佩（注３）を取り付けるための共裂の座を付す。環佩の座の表には鎖縫い風の刺繍で「悚牧」と記す。環佩の座の裏は萌葱平絹を付ける。つり緒の座は欠失する。

［時代］元時代もしくは室町時代

［説明］以亨得謙所用の袈裟。墨染した比較的薄手の麻を用いて、二十五条・三長一短、すなわち百枚の布片を縫い合せた割截衣である。墨染の麻という質素なつくりの袈裟であるが、黄色の絹糸による縫い目が黒地に映え、規則正しく並んだ田相を美しく見せている。

この袈裟の環佩の座には「悚牧」という文字が鎖縫い風の刺繍で施されている。悚牧は以亨得謙の道号である「嬾牧」を意味することから、この袈裟は得謙が所用したものと考えてよかろう。

本来、袈裟の縫い方は真縫いを避け、刎刺縫いを原則とする。刎刺縫いはいわゆる返し縫いであり、一般には糸目が表面では点線となってあらわれ、裏面では破線となってあらわれる。この袈裟も刎刺縫いをおこない、表側では糸目が点線となってあらわれているが、裏面は破線ではなく、鎖縫い風の糸目となっている。また環佩の座の「悚牧」という文字にも鎖縫い風の繍技がおこなわれている。こうした繍技はかつて唐より舶載された繍仏などにみることができるが、日本の中世期の刺繍にはほとんど見かけることのない技法である。このことから、この袈裟は得謙が元より持ち帰ったものではないかと考えられる。しかしながら、この技法によってのみ製作地を断定することは早計にすぎるので、現段階では日本での製作の可能性も考慮しておく必要があろう。

ともあれ、以亨得謙が所用したことが環佩の座の銘よりあきらかであり、中世期の袈裟資料として貴重である。

環佩の座
銘「悚牧」

紗布衫　一領

［法量］丈 121.0㎝　裄86.5㎝
袖丈65.0㎝　袖幅52.0㎝

［形質］白茶麻の単仕立て。後身頃（差図２）は二幅で、背縫いは右身頃をうえにして、５㎝ほど重ね、背中の背縫い部分はうえに重なる右身頃を縫い付けず、口が開いた状態とし、左身頃の腰部分には約８㎝ほどのベルト状の紐を縫い付けている。前身頃には衽（差図２）を設けて、襟は掛け襟のようにして衽に重ねている。袖は一幅の奥袖に、半幅の端袖をつけた平袖で、振りと身八つ口（差図２）を設ける。振りの開き口と身八つ口には黄平絹の笹縁を廻らす。下前の胸元部分には茶綸子の胸紐の断片（後補か）が縫い付けられている。肩山の裏と、襟の内側には補強のために麻裂を重ねている。

［時代］室町時代

［説明］紗布衫は直綴の下着として用いる麻の単仕立ての衣のことをいうが、一般に紗布衫と呼ばれるものは、直綴に合せて袖幅が長大である。その点で萬歳寺のものを紗布衫と呼ぶには形状に若干の相違がある。しかし、麻の単仕立てであることからすると、下着的に用いられた可能性が強く、またこれが禅宗寺院に伝来した禅衣の一つとすれば、やはり紗布衫の一種と考えられる。

この種の法衣については研究も進んでおらず、比較する遺品資料も少ないため、製作時期を確定することは難しい。ただ、襟幅がやや広く、衽下りも大きいといった仕立て具合は古様を示す特徴ではないかと思われる。江戸時代にまで下がる仕立てではな

いと考えられるので、一応、室町時代としたが、確たる根拠はない。

紗布衫

九条袈裟　　一領

［法量］縦128.5cm　横226.5cm

［形質］褐色、絹製の九条割截衣。縁、角帖とも共裂を用いる。壇隔は三長一短。葉様は開葉で、各縦葉の一箇所と横葉下辺の一箇所を約7～7.5cmほど開ける。中条上端には、裂を重ねて座とし、そこに先端を葵葉に象った金銅魚子地唐草文の掛け金具を付ける。また右第四条の上端には裂を重ねて環座とするが、環佩は欠失する（牙製の環佩が別途保管されているが、この袈裟のものか不明）。袈裟に用いられた裂は褐色を呈した薄手の平絹で、飛文様風に牡丹、鳳凰、霞文を、白の絹糸と平金糸を用いて縫取織りにあらわしている。

［時代］江戸時代

［説明］この袈裟には牡丹、鳳凰、霞の文様が縫取織りであらわされている。一説にこの九条袈裟は見心来復から以亨得謙へ伝えられた伝法衣とされる。しかしながら、例えば鎌倉時代（13世紀）の白小葵地鳳凰二陪織物袿（鶴岡八幡宮）や、長禄2（1458）年に足利義政が奉納したと伝える青小葵地桐竹鳳凰二陪織物表着（熱田神宮）など、縫取織りの技法によって鳳凰をあらわした中世期の遺例とこの袈裟の文様を比較すると、鳳凰の尾の部分などはあたかも唐草の蔓のようになり、かなりの形式化が認められる。また、牡丹と鳳凰を間遠に置き、間に霞を配した意匠構成からは、これが日本で製織されたことを思わせる。中条上端に付けられた葵形の金銅魚子地唐草文の掛け金具は古様を感じさせるが、袈裟そのものの製作は江戸時代に入ってからではないかと考えられる。

七条袈裟　　一領

［法量］縦125.0cm　横245.0cm

［形質］木蘭色平絹を用いた七条割截衣。縁、角帖とも共裂を用いる。段隔は二長一短。葉相は開葉で、縦葉・横葉とも葉の中央部を縫い、それぞれの一辺を開葉とする。環の座は紅地輪宝雲文様繻珍、つり緒の座は萌葱繻子である。

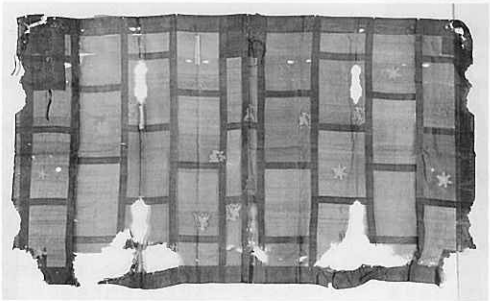
七条袈裟　　一領

［法量］縦113.0cm　横212.0cm

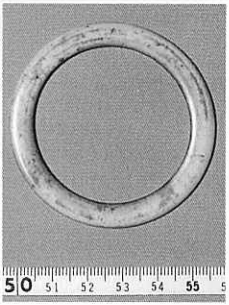
［形質］木蘭色平絹の七条帖葉衣（注4）。縁は共裂を用いる。壇隔は二長一短。葉相は刺葉で、葉の周辺を縫いつける。角帖ならびに環の座は紅地輪宝雲文様繻珍である。

［時代］二領とも江戸時代

［説明］二領ともに七条袈裟で、一領は割截衣、他の一領は帖葉衣という違いがあるが、前者の環座と後者の角帖ならびに環座に用いられた紅地輪宝雲文

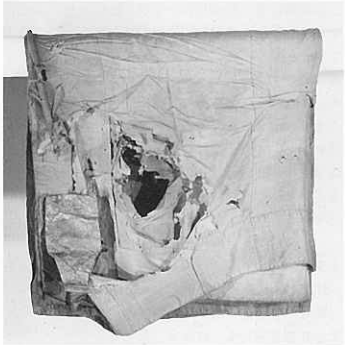


九条袈裟



牙製環佩

様繻珍は共裂であり、同時期に製作された袈裟と考えられる。この裂を見るかぎりでは江戸時代のものと思われる。



七条　割裁衣

七条　帖葉衣（部分）

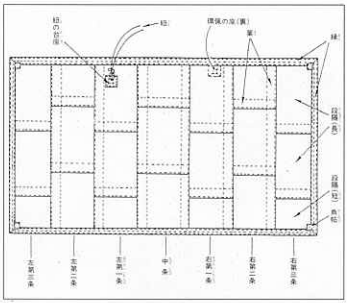
注1．反物を長、短の布片に裁ち切って縫い合わせ、一領の袈裟としたもの。

2．長三枚、短一枚の段隔をもって一列の条を成していること。

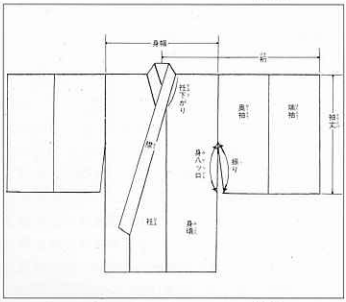
3．つり緒と結び、袈裟の前後を留める輪。

4．一枚の布の上に縦、横それぞれの葉を貼って縫った袈裟。

5．井手誠之輔「萬歳寺の見心来復像」『美術史』第119号
井手誠之輔「萬歳寺の以亨得謙像」『佛教藝術』第166号



差図1



差図2

鳥栖市河内町にある本城山萬歳寺は脊振山系の奥深く、海抜200メートルばかりの地にあり、臨済宗南禅寺派に属している。昭和60年に当館により行われた調査により2幅の肖像画と法衣類などが確認された。

肖像画については詳細な論文が発表され（注1）昭和62年には国の重要文化財に指定されるなど注目を浴び、その価値が明らかにされてきたが、法衣類についてはあまり触れられることはなかった。

1991年5月、佐賀県文化課の招聘で、染織史を専門に研究される河上繁氏による調査が行われた。その結果、二十五条袈裟については以亨得謙所用のものであることが認められ、平成4年3月に佐賀県重要文化財に指定された。この稿はその調査の成果をまとめていただいたものである。

写真の多くは九州大学文学部美学・美術史研究室より提供していただきました。記して感謝いたします。

（編集　竹下記）

資料紹介「常設展－貝と貝化石より－」

Ⅰ．はじめに

貝類は，海洋，川・湖沼，陸上と地球上のあらゆる場所に適応して生活しており，世界に10万種以上が生息し，地球上で最も繁栄している動物のひとつで，節足動物に次いで種類が多いといわれている。日本には6000種以上が生息し，貝産国といわれる。この理由は，日本が南北に細長く亜寒帯から亜熱帯まで存在すること。千島海流（親潮）と日本海流（黒潮）といわれる寒暖２海流が，日本列島を洗いながら南下・北上し北方系の貝も南方系の貝も列島の中央部付近まで分布する。また，日本列島周辺には世界有数の深海域が存在し，ここには特有の種が生息していることである。さらに陸地では，地形の複雑さや植物相の豊富さなどから多くの陸産貝類が生息しているためである。

人類は古来，貝を食用としてきましたが，その他貝殻は貨幣の代わりに使用したり，加工して玉じゃくしやボタンなどの日用品，法螺のような笛類，螺鈿やブローチなどの装飾品，その他多くのものに使用してきた。

また，貝類は，自然が生み育んだ類い稀な造形物で，なぜこのようなまでに変化しなければならないかっただろうと思えるように大きさ，形態，色彩が多様化している。このため人々を魅了し収集家や愛好家も多い。さらに，研究対象として分類学ばかりでなく生態学，行動学，生物地理学など多くの分野でも大変興味深いものになっている。

今回の常設会では「貝と貝化石」を取り上げ，形態や色彩の変化した種類や珍しい種類を中心として館蔵品の中から展示紹介しましたが，そのうち，現生のイモガイ類の館蔵品を紹介する。

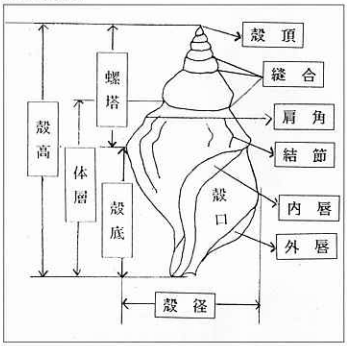
Ⅱ．貝類とは

貝類は，軟体動物門に属する動物で，単板綱，多板綱，無板綱，おの足綱（二枚貝類），腹足綱（巻貝類），堀足綱（角貝類），頭足綱と７つの大きなグループに分けられる。

一般的に炭酸カルシウム（$CaCO_3$）を主成分とする貝殻で体をおおわれている種類を指す。しかし，一部の種類では貝殻が退化して軟体部（身の部分）にうもれているものや消失しているものもあり広い意味では軟体動物と同意語として用いられ，ウミウシ類，アメフラシ類，ナメクジ類，タコ・イカの類のように普通貝殻を持たない種類も含まれる。そのうち54％が海産で海岸から水深7000ｍに近い深海まで，陸産は巻貝のみで33％で落葉下，樹上，植物上などに，淡水産は13％で河川，湖沼，地下水に巻貝と二枚貝が見られる。

一方，石灰質の殻を持つ種類でもシャミセンガイ（方言：メカジャ）は触手動物，ウニ類は棘皮動物カメノテやフジツボは節足動物であり貝類ではない。

大きさは１㎜以下の微小なものからダイオウイカのように20ｍに達するものまであるが，一般的にいう貝類では，殻高が約1.2ｍのアラフラオオニシが巻類で，殻長が約２ｍのオオシャコガイが二枚貝で最大である。



巻貝類の各部の名称

Ⅲ．イモガイ類の一般的特徴

イモガイ類の一般的な形態は，殻は螺塔が低く体層は大きく，肩で最も幅広く，下方へ細くなる。殻口は多くは狭く長い。蓋は葉状で非常に小さい。

肉食性で，餌をとるための毒腺を持ちゴカイ類や小魚等を毒で麻痺させて丸のみする。毒は小型の種類ではそれほど強くないが，大型のアンボイナやタガヤサンミナシでは猛毒をもち，誤って刺されると人間も死ぬことがある（吉良：原色日本貝類図鑑－増補改訂版－保育社：1959；波部他：標準原色図鑑－３・貝－保育社1967；行田：アンボイナの刺毒による死亡事故：九州の貝－第36号－九州貝殻談話会：1991；など）という。

Ⅳ．館蔵品のイモガイ類

日本産のイモガイ科は約120種が知られているが館蔵品は37種81点である。

1．ツボイモ

殻形は細長い楕円筒状で，螺塔は高まり，螺頂は尖る。体層には細かい螺溝が全面にある。殻口は狭いが下端でやや開く。
赤褐色地に粗く大きい白色斑がある。
紀伊半島以南の潮間帯以下に生息する。
写真はフィリピン産

2．アンホイナ

殻は薄く，形は細長い円筒形で，螺塔は低く多少凹む。
殻口は幅広い。
帯紅白色地に紫褐色の雲状斑があり，その間は細かく網目状になっている。
紀伊半島以南の潮間帯以下のの岩礁に生息する。
生貝を採集して，不注意に持った刺殺事故もある。
写真は沖縄県思納村産

3．ダイミョウイモ

殻形は倒三角形で，重厚で堅固。螺塔は低平で頂部のみ高まり，尖る。体層の肩部は角張るがなめらか。
殻口は狭いが下端はやや広くなる。
黄赤色から黄橙色で，大小の黒斑列がある。
奄美諸島以南の水深約20ｍの砂底に生息する。
写真の産地は不明

4．ナンヨウクロミナシ

殻形は倒円錐形で重厚，螺塔の各層には規則正しく糸状螺脈をめぐらし，層上に結節を具え波状に起伏する。
黒い殻皮の上に三角形の白斑がある。
奄美諸島以南の潮間帯の岩礁に生息する。
写真は沖縄県宮古島産

5．ニシキミナシ

殻形は円状筒状で，螺塔はわずかに高まり，螺頂は尖る。殻口はやや広く下端は更に広まる。
白色または微紅色地で，紫褐色の細線斑が集合して雲状斑で帯状となっている。
螺塔の頂部は僅かに赤く彩られる。
奄美諸島以南の潮間帯以下の浅い海底に生息する。
写真は沖縄県宮古島産

6．カバミナシガイ

殻は薄く，形は倒三角形で螺塔は低く，頂部で僅かに高まる。体層の肩部は角張るがなめらか。
赤褐色の地で，体層中央はやや淡くなり，末端は濃い茶褐色にそめられる。
紀伊半島以南の潮間帯以下の岩礁に生息する。
写真は鹿児島県屋久島産

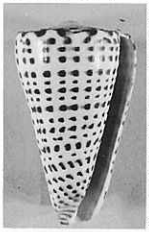
7．スジイモガイ

殻形は倒三角形で，重厚で堅固。螺塔は低く頂部で高まり，尖る。体層は平滑。肩部は丸味をおびなめらか。
殻口はやや幅広い。
赤褐色地に淡黒褐色の横縞を全面に巡らす。
鹿児島県種子島以南の潮間帯以下の岩礁生息する。
写真の産地は不明

8．ロウソクガイ

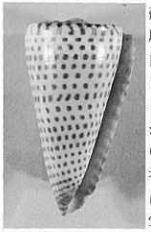
殻形は肩部で幅広く，短い倒円錐形で，重厚で堅固。
螺塔は低く僅かに高まる。
黄白色で斑紋はほとんどない。
生貝は灰褐色の厚いビロード状の殻皮でおおわれる。紀伊半島以南の潮間帯以下の砂底に生息する。
写真は鹿児島県鹿児島湾産

9．クロフモドキ



殻形は倒円錐形で重厚，螺塔は低平，肩部は角張る。白色地に黒斑列が多数あるアンボンクロザメによく似ているが，黒色約斑の方形は流れ形が崩れる。橙色帯がないことで区別できる。
奄美諸島以南の潮間帯の岩礁に生息する。
写真は沖縄県久米島産

10．アンボンクロザメ



殻形は倒円錐形，螺塔は低平，肩部は角張る。
白色地に黒斑列が多数あり，３本の橙色帯がある。
クロフモドキによく似ているが，黒色約斑の方形は崩れないことで区別できる。
奄美諸島以南の潮間帯の岩礁に生息する。
写真は宮古島産

11．タガヤサンミナシ

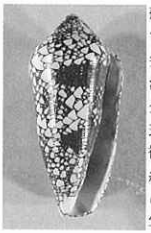
殻は膨れ楕円形，螺塔は高く円錐形で頂部は尖る。
体層の肩部はなだらか。殻口は比較的幅広い。
黄褐色地に黒褐色の縦縞で縁どられた変形三角形の白斑があるが，白斑は個体差がある。
紀伊半島以下南の潮間帯以下の小石がある砂底に生息する。

写真は奄美大島産

12．イタチイモ

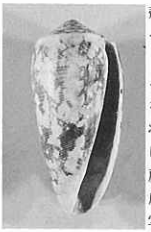
殻は倒円錐形で，形部は幅広く低部で著しく狭まる。螺塔は低く高まりは僅か。
黄色地に，肩部付近から螺塔と中央部に白色帯がある。中央部の白色帯には２列の黒斑がある。紀伊半島以下南の潮間帯付近の岩礁に生息する。
写真の産地は不明

13．ナガアジロイモ



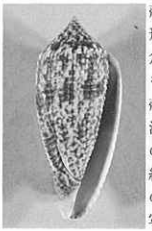
殻は細長い倒円錐形で前端部で狭まる。螺塔は高まり鈍く尖る。殻口は狭い。
淡紅褐色地に細密な網状斑が全面に拡がり大小の変形白色斑を散らす。中央部と底部に褐色の帯状斑がある。
紀伊半島以下南の潮間帯以下に生息する。
写真は沖縄県読谷村産

14．ベッコウイモ



殻は細長い倒円錐形，肩部はやや角張る，螺塔は低いが高まりを持ち頂部は円味を帯びる。殻口は狭いが前端で広くなる。淡黄色地に黒褐色の雲状斑が鼈甲模様状となつて縦に並ぶ。
房総半島以南の潮間帯の岩礫底の砂中に生息している。
写真は高知県土佐湾産

15．ナガイモガイ



殻は細長く前端で狭まり仏塔形，螺塔は高く尖る。肩部は角張る，体層は明瞭な螺状溝を全面的に刻む。
殻口はやや狭く平行する。
淡褐色地に，赤褐色帯と横筋の斑点を散らす。
紀伊半島以下南の20～100ｍの細砂底に生息する。
写真は台湾高尾県沖産

16．ヤナギシボリイモ

殻は肩部で幅広く前端で細まる倒円錐形，螺塔は低いが高まりがある。
殻口は狭小で平行する。
淡灰色地中央部と底部に暗褐色の帯状斑を巡らす。帯状斑の上下は多くの褐色の縦筋や雲状斑ほ散らす。
紀伊半島以下南の潮間帯以下の岩礁に生息する。
写真の産地は不明

（資料係長：自然史担当；宮﨑　武夫）

行事のお知らせ

○平成４年度佐賀県立美術館企画展

鍋島緞通－もめんの華－

10月９日（金）～11月３日（火・祝日）

佐賀県立美術館

江戸は元禄時代に創始したという鍋島緞通は、絹、羊毛とはちがい木綿で織られた敷物です。鍋島藩の御用品として育まれ、牡丹の花をモチーフした力強く格調のある蟹牡丹文で知られています。歴史の中に鍋島緞通を探り、素朴でおおらかな木綿の工芸の価値をおよそ100枚の緞通の中から再認識したいと思います。

会場	展示質	展示主テーマ名		会期
博物館	１号展示室	佐賀県の自然	昔のいきもの－化石－	５月23日～７月26日
			佐賀県の昆虫類－トンボ－	７月31日～９月27日
	２号展示室	佐賀県の歴史	遺跡出土品、先覚者の書	５月23日～７月26日
			遺跡出土品、佐賀の文教	７月31日～９月27日
	３号展示室	〔開館予告〕名護屋城跡資料館（仮称）収蔵資料展		７月３日～７月26日
		くらしの造形①－包み－		７月31日～９月13日
	大展示室	郷土の民俗	船の文化	５月23日～７月26日
			匠の技	７月31日～９月27日
美術館	１号展示室	彫刻と工芸		７月31日～９月27日
	２・３号展	所蔵品による－現代美術の断面－		７月31日～９月27日

○博物館土曜教室及び講演会

回数	テーマ・演題	実施日		担当者
第49回	名護屋城とその時代	７月４日(土)	午後２時～	名護屋城跡調査研究室　本多　美保
第50回	400年の時空を超えて	７月18日(土)	〃	名護屋城跡調査研究室　五島　昌也
第51回	土器の復元に挑戦しよう	８月１日(土)	〃	当館学芸課長　木下　巧
第52回	佐賀県のトンボ類	８月22日(土)	〃	当館資料係長　宮崎　武夫
第53回	くらしの造形～包み～	９月５日(土)	〃	当館学芸員　山崎　和文
第54回	佐賀市周辺の環境と植物	９月26日(土)	〃	佐賀大学助教授　宮崎　博巳

○人事異動　平成４年４月１日付

転入　専門員　一丸正美（県立病院厚生館主査より）　　転出　学芸課長　樋渡敏暐（名護屋城跡調査研究室長へ）

学芸員　川副義敦（佐賀県立佐賀西高等学校教諭より）　　主査　古川宣明（県立病院厚生館主査へ）

主事　石橋邦広（厳木町立厳木小学校主事より）　　主査　古澤貞善（佐賀県立金立養護学校主査へ）

昇任　学芸課長　木下　巧（佐賀県立博物館・美術館専門員より）

佐賀県立博物館・美術館報　第97号　平成４年７月１日
編集発行　佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840　佐賀市城内1-15-23　TEL0952-24-3947　FAX0952-25-7006
印刷　鹿島印刷社